

は刻々急迫しつつあることは想像できるが、情報が全く入らないので戦況全般の動きがわからない。

私の指揮する重機関銃隊では重機二挺に対し実弾は六百発しかなかった。重機は一分間六百発の実弾を発射する能力があるので、二挺で連続射撃をすれば三十秒しかもたない。あとは無用の長物スクラップと等しくなる。部下の兵は誰も小銃一挺、銃剣一本、手投弾一発も持っていない全くの素手である。全弾撃ちつくしたあとはどうやって闘うというのか。上からは何の指示もない。アメリカ軍は前進にあたっては多数のM4戦車を先頭に立て、我に数倍する兵員をもって火炎放射器を発射し、自動小銃を撃ちまくって攻撃してくるのである。我友軍部隊には、これに対向できる戦車大砲、対戦車砲、

ロケット砲や戦車に対し関迫攻撃を行う黄色火薬もない。予備士官学校で訓練した対アメリカ戦闘を行うにも手の打ちようがない。内心困り果てた私は、せめて竹槍でもつくって兵に武器として与えようと思って竹藪に入って手頃な太さの竹を軍刀を抜いて切ってみたが、刃が竹の表面をすべって一本も切れなかった。当時の軍刀は形ばかりで、なまくらで到底使える代物ではなかった。こんな刀で攻撃して来る生身の人間を軍服の上から切るようなことはとてもできない。第一敵に近づく前に撃たれてしまう。恐らく玉砕した第一線の部隊もこういうひどい状況の下で無念の玉砕を続けたものと思うと暗澹（あんたん）たる気持になった。然し日本の軍隊はこのような劣悪な状況にあっても最後の一兵まで死力

をつくして闘はなければならない。陸軍刑法によれば「敵前において逃亡したる者は死刑に処す」となっており、捕虜になった者も死刑である。一度戦闘が起れば、逃亡しても死、攻撃に出ても死、洞窟陣地についても死である。この戦力この状況で部下を指揮してどう闘うか、指揮官としての責任の重圧と人間としての苦悩の中で、暑い夏が一日一日と過ぎてゆく。部隊全員が死を覚悟して、洞窟陣地を掘り進んでいるところに、突如として一大奇蹟がおこったのである。

昭和二十年八月十五日、日本はついにアメリカ・イギリスをはじめとする連合軍に無条件降伏したのである。言い表すことのできない異様な興奮と歓喜が全部隊の間に爆発的に拡まった。軍人が戦争に負けて喜